

青年期のアイデンティティ発達における 家族の影響関係

—家族関係の個別性と全体性の機能に着目して—

御藤 有貴

問題と目的

アイデンティティの確立は、青年期における重要な発達課題であり (Erikson, 1950), その確立のためには、青年が自身の内部に斉一性と連続性を感じられること、さらに他者からの承認を自覚することが必要だとされている (Erikson, 1959 西平・中島訳 2011)。そのため、青年のアイデンティティ発達に、他者との関わりは不可欠である。

青年期のアイデンティティ発達に重要な影響を及ぼす他者として、家族が注目されてきた。家族関係という文脈については、主にアタッチメント理論 (Bowlby, 1988) に基づいて、家族関係とアイデンティティの関連を検討した研究が広く蓄積されており (e.g., Crocetti, Branje, Rubini, Koot, & Meeus, 2017), 中でも両親と青年との個別の関わり、すなわち家族関係の個別性が着目されてきた。

しかし、両親との個別の関係が上手く構築できていない場合でも、家族全体の関係性の質に注目することで、アイデンティティを発達させている青年がいるという臨床事例研究が報告されている (本多, 2014; 内田, 2011)。これらの事例では、家族全体の関わりに注目する様子がみられたことが共通している。以上より、両親との個別の関係性に否定的なイメージを持っていたとしても、家族の全体性の認知の仕方によっては、青年が自身のアイデンティティを統合していくことができる可能性がある。

家族の全体性に対する青年の認知を捉える研究は、家族がどの程度健康的に機能しているかを表す家族機能に着目してきた。先行研究では、家族全体のコミュニケーションがアイデンティティの探求とコミットメントと間に正の関連を (Meeus, Oosterwegel, & Vollebergh, 2002), 家族機能とアイデンティティの混乱の間に負の関連を示すことが明らかになっている (Schwartz, Pantin, Prado, Sullivan, & Szapocznik, 2005)。つまり、家族の全体性に対する認知が肯定的であることは、青年の健全なアイデンティティ発達に寄与すると考えられる。以上より、青年が家族関係の個別性 (両親-青年関係) に固執せず、家族の全体性に注目し、家族全体を肯定的に捉えることが、アイデンテ

ィティの発達に寄与すると考えられる。しかし、家族関係の個別性と全体性の認知の仕方が、それぞれどのように青年のアイデンティティ発達に関連しているかは、未だ実証的に検証されていない。

また、事例研究からは、家族の全体性に着目してアイデンティティ発達を進めていく際、青年の視点が、個別の家族成員との関係性から、当該の家族成員を取り巻く家族全体の関係へと移り替わった様子がみられたことから (本多, 2014; 内田, 2011), 視点取得 (相手の立場からその他者を理解しようとする認知傾向; 鈴木・木野, 2008) の獲得も青年のアイデンティティ発達に影響していると考えられる。

そこで本研究では、青年の個別の家族成員 (父親・母親) との関係性と、家族全体の関係性の認知、視点取得の程度が、アイデンティティ発達とどのように関連しているかを検討する。

方法

調査参加者

県立高等学校 1 校に通う高校 1 年生を対象に質問紙調査を実施した。対象者は回答に不備がなく、家族成員として父親 (またはそれに相当する養育者; 以下, 父親) と母親 (またはそれに相当する養育者; 以下, 母親) の両方を回答した者に絞った。最終的な分析対象者は、183 名であった (女性 127 名, 69.4%, 平均年齢 15.70 歳, $SD = 0.46$)。

調査内容

アイデンティティ エリクソン心理社会的段階目録 (第 5 段階) 12 項目版を使用した (Rosenthal, Gurney, & Moore, 1981; 邦訳版は畑野・杉村・中間・溝上・都筑, 2014)。統合 5 項目, 混乱 6 項目の計 11 項目を分析に使用した (5 件法)。

視点取得 多次元共感性尺度 (鈴木・木野, 2008) のうち、「視点取得」の下位因子 5 項目を使用した (5 件法)。

両親との個別の関係性 日本語版 Network Relationships Inventory (Furman & Buhrmester, 1992; 日本語版は吉武・内海・菅原, 2014) のうち、Behavioral Systems Version (NRI-BSV) を使用した。8 因子, 24 項目を分析に使用した (5 件法)。参加者の父親・母親それぞれについて回答を求めた。

家族全体に対する認知 The Family Relations scale (Tolan, Gorman-Smith, Huesmann, & Zelli, 1997) の6因子のうち、凝集性, サポート, 組織, コミュニケーションの4因子の日本語版を作成し使用した。サポートは、項目内容から、因子名を「コミュニケーション不和」とした。また、信頼性分析の結果、組織を除外した。計14項目を分析に使用した(5件法)。

全ての尺度で、Cronbachの α 係数は $\alpha = .59 - .92$ の範囲にあった。

結果と考察

アイデンティティと視点取得, 家族関係の関連

アイデンティティと、視点取得, 両親との個別の関係性, 家族全体に対する認知の相関係数を算出した。その結果、アイデンティティの統合と、視点取得 ($r = .17, p < .05$), 個別肯定得点 ($r = .20, p < .01$), 家族全体得点との間に弱い正の相関が ($r = .20, p < .01$), 個別否定得点との間に弱い負の相関がみられた ($r = -.17, p < .05$)。また、アイデンティティの混乱と、視点取得 ($r = -.18, p < .05$), 家族全体得点との間に弱い負の相関が ($r = .22, p < .01$), 個別否定得点との間に弱い正の相関がみられた ($r = .21, p < .01$)。アイデンティティと家族関係に関する結果は先行研究と一致する。また、アイデンティティと視点取得に関連がみられ、自分自身を自覚することと、相手の立場から他者を理解する視点を持つことが影響し合いながら、青年のアイデンティティが形成されていることが示唆された。

また、視点取得と個別肯定得点, 家族全体得点との間には弱い正の相関が ($r = .21, r = .27$, ともに $p < .01$), 個別否定得点との間には弱い負の相関がみられた ($r = -.21, p < .01$)。視点取得の獲得は、家族の全体性の認知と関連がみられたが、家族の個別性とも関連があったことから、家族の全体性の認知には、他の要因もあることが示唆された。

視点取得と家族関係の様相とアイデンティティ

個別肯定得点 (Pos), 個別否定得点 (Neg), 家族全体得点 (Family), 視点取得 (PT) の標準化得点を用いて階層的クラスター分析 (Ward法, 平方ユークリッド距離) を行ったところ、解釈可能性から5クラスターが妥当であると判断された。各クラスターをそれぞれ“個別・肯定/全体・肯定/客観群”“個別・肯定/全体・肯定/主観群”“個別・否定/全体・肯定/客観群”“個別・否定/全体・否定/他者視点途上群”“個別・否定/全体・否定/主観群”と命名した (Figure 1)。階層的クラスター分析の結果、両親との個別の関係性を否定的に捉える一

方で、家族全体を肯定的に捉えている青年が抽出された (クラスター3)。

各クラスターを独立変数, アイデンティティの統合, 混乱を従属変数として1要因分散分析を行った。その結果、アイデンティティの混乱において、クラスター間で有意差が認められた ($F(4, 178) = 2.84, p < .05$)。多重比較 (Tukey法) の結果、“個別・否定/全体・否定/主観群” (クラスター5) の青年は“個別・肯定/全体・肯定/客観群” (クラスター1) の青年よりも混乱について有意に高い得点を示した。この結果は、両親または家族との暖かな関係の認知が青年のアイデンティティ発達と関連するという先行研究の知見と一致する。

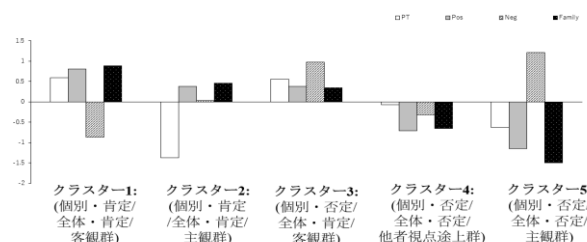


Figure 1 視点取得, 個別肯定得点, 個別否定得点, 家族全体得点によるクラスター分析

一方、“個別・否定/全体・肯定/客観群” (クラスター3) と“個別・否定/全体・否定/他者視点途上群” (クラスター4) 及び“個別・否定/全体・否定/主観群” (クラスター5) の間にアイデンティティの得点に有意差はみられなかった。よって、家族全体を肯定的に捉えていれば、両親との個別の関係性が否定的であっても、アイデンティティを発達させるという仮説は支持されなかった。

以上から、アイデンティティ発達には、青年が家族の個別性と全体性をともに肯定的に捉えることが重要だと考えられる。一方で、アイデンティティ発達と視点取得には関連があったが、家族の全体性の認知に特に強い関連はみられなかった。しかし、青年の視点取得と家族関係の様相を捉え、彼らがアイデンティティを統合させていく段階が示唆されたことは、本研究の意義であると考えられる。今後は、視点取得や家族の全体性の認知が、アイデンティティの発達に結びつくまでのプロセスについて検討する必要があると思われる。

主な引用文献

Erikson, E. H. (1959). *Identity and the Life Cycle*. New York: W. W. Norton. (エリクソン, E. H. 西平直・中島由恵 (訳) (2011). *アイデンティティとライフサイクル* 誠信書房)
 (主任指導教員: 杉村 和美
 副指導教員: 清水 寿代, 梅村 比丘, 服巻 豊)